令和３年度　第１回　校長「語らいサロン」

令和３年６月１２日（土）　11：30～12：00

テーマ

「ジェンダー・フリーな社会をめざして　（１）
～ジェンダー・バイアスについて～」

Zoomオンライン開催

川中子：こんにちは。それでは、お時間となりましたので、令和３年度第１回の校長「語らいサロン」を始めます。今日は、直前まで５年生のオンライン中継を行っておりましたので、少々バタバタしておりますが…。では、自己紹介をお願いしてもよろしいでしょうか。では、私から見えているところからで…。Ａさんお願いします。Ａさん：はい。Ａです。よろしくお願いします。２年と５年に息子が通っております。よろしくお願いします。

Ｂさん：Ｂと申します。１年、４年、６年に子供がいます。よろしくお願いします。

Ｃさん：皆さん、はじめまして。Ｃと申します。５年生に次女が通っております。お姉ちゃんが去年まで通っていました。よろしくお願いします。

Ｄさん：Ｄともうします。６年生と４年生に子供がいます。よろしくお願いします。

Ｅさん：Ｅです。よろしくお願いします。子供は今５年生に通わせていただいています。先程授業参観も見させていただきました。ありがとうございます。

Ｆさん：…。（通信トラブルで、音が出ない。）

川中子：音は聞こえていますか？（「ハイ！」）それでは、また、後ほどお伺いします。では、最後、Ｇさんお願いします。

Ｇさん：５年生に子供がいます。よろしくお願いします。

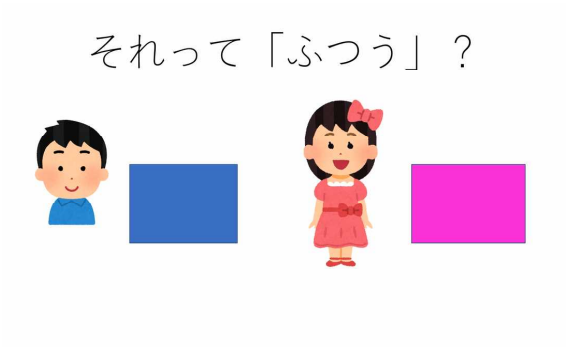
川中子：今日はお父さんも一緒に（ご参加ですね）。ありがとうございます。

　それでは、今日は、私がこのところずっと考えていることについてお話しし、保護者の皆様のご意見を聞かせていただければなと思っております。実は、昨年度の学校評価アンケートにジェンダー・バイアスについてのご意見をいただいて、ちょうどその頃私も同じようなことで悩んでいるというか、考えているところだったので、今年度１年かけてしっかり取り組んでみたいなと思っています。えー、こんな風に思うようになったのも、今ご覧いただいている出口治昭さんという方の本を読んだりしてからなんですね。この本の中で、以前、日本の企業が世界で活躍していたのに、今は全然だめになってしまっているという情報が出ていました…

（資料の確認を行いました。）

　特に女の子をどう育てていくかっていう話になるんですが。うちは４人子供がいまして、女の子ばっかりなのですが。女の子がどういう風に社会に出て行くべきなのかということを考えていかないと先程申し上げたような状況は改善されないのではないかと。そこで、子供たちに、まず、子供たちがどういうジェンダー・バイアスをもっているかなということで、この間朝礼でお話しして、子供たちに聞いてみたんですが。その時に流したものを動画で見ていただこうかと思います。

（動画　「それって『ふつう』？」）



（詳しくは、HP「今週の朝礼」に掲載）

川中子：はい。今、見ていただいたものを子供たちにも見せて、それが皆さんにとってどういう風に感じますか。「ふつう、特に変だとは思わない」って感じか、「何か、ちょっと変な感じ」か、「いや、絶対変でしょう！」って感じかを聞いてみました。４年生以上の子にはアンケートを実施して、その結果、今三吾小に来ている子供たちは、私が子供だった頃に比べますと、ジェンダー・バイアス、社会的な性の役割に関する思い込み度というのは低いんだなあっていうのを感じました。ちょっと、そのデータも共有します。

（データの確認）

　私が子供の頃には、こういうのは当たり前だなあと言う考え方があったんですが、今の子供たちには当たり前じゃないという思いがあるんです。子供たちのバイアスが下がっている、低くなっているというのはとってもいいことだなあと思うんですが。保護者の皆様はこのあたりのことについて、どうお感じになりますかというところをお聞かせ願えればなあと思います。それでは、Ａさんからでよろしいですか？

Ａさん：そうですね…。今、やっぱり「多様性」という意味で、男女っていうものだけでなく、いろんなことが議論されていると思うんですけど。女の子は赤、男の子は青っていうのは、やっぱり、もう個人のそれぞれの好みなのかなって思うのと。あと、例えば、力が強いのはっていうのになってきちゃうと、性として男性と女性の違いと言いますか。そういうものを踏まえていくと、このあいだ学校だよりで校長先生がおっしゃっていた、「平等と公平」みたいなもの。そういったところのさじ加減といいますか。男子と女子の違いというのを含めた上での「公平」であるとも思いますし。今は、女の子だから、男の子だから、っていうよりも、その子その子の好みとか。こういう場合は、こう、というのではなく、その子その子がいいもの、個人としてみていくのがいいのかなっていうのを最近すごく思っています。以上です。

川中子：ありがとうございます。男らしさ、女らしさじゃなくて、その人らしさを大事にしたいっていう。そういうのを私も子供たちにしっかり身に付けてほしいなと思っているところです。では、Ｇさんのところはいかがでしょうか。

Ｇさん：そうですね。身体のつくりのことなどは、そろそろ５年生なので、女の子に生理が始まったりして、女性と男性の性の違いがあるんだよって話をしたりして、そういうときには助けてあげたりとか、声をかけてあげたりとか。まあ、声をかけられるのもいやかもしれないけど。分からないように、助けてあげることも必要だよって言う話しはしますが、やはり好みについては、個人のことなので、男性だから、女性だからって言うことは、言っちゃ池なんだねって。逆に子供からされる場合もあります。一つ感じてたのは、周りから「それ、女の子の服じゃない？」って言われたときに、本人がいやだと思って、着なくなっちゃうってことが過去にあって、そういうところで、自分の好きなものを好きって言える力も、養っていきたいなっていうふうに感じます。以上です。

川中子：ありがとうございます。本当にそうですね。今、話題に挙げたいのは、男と女の性の違いというのはどうしてもあるので、ジェンダーレスを目指そうって言う話しではなく、男はこうあるべき、女はこうあるべきという、社会的な役割の事に限定しておきたいと思います。ジェンダーの話になると、いろんな話題に広がっていくものなので、ちょっと難しいのですが。今、Ｇさんのお話しにあったように、服装のことで、それ女の子っぽいねなんていうのは、いくらでもあるんじゃないかな。そんな時、どう生きていくべきなのかっていうのは難しいところですね。それでは、Ｃさんのところは女の子だと思いますがいかがでしょうか。

Ｃさん：アンケートについてでいいですか。そうですね。私が子供の頃は、やっぱり今よりももっと男はこうあるべき、女はこうあるべきって言うのは強かったと思います。なので、子供の頃聞かれたら違和感を感じていたと思うんですけど、今になってみると、まったく違和感を感じなくなったなと。それ

は、やっぱり学習したからだと思うんですね。やはり、大きな傾向というか、男はこういう傾向がある、女はこういう傾向があるというのは、文化として今まで走ってきた、社会がそういう風に走ってきたというのがあるので、大きな傾向はおそらくあるのだろうと思います。ソウでない人もいるということを知る、というか、想像する、というか。まあ、決めつけないってところが一番大事なんだろうなって。まあその、大勢の人の傾向を知っているって言うのは、大事な情報だと思うので。決めつけないって事ですかね。

川中子：ありがとうございます。まあ、女性の問題、男性の問題っていうのは、ダイバーシティーの問題でもあるのかなと思います。日本で、特に、文化的に男性と女性の役割というのが、非常に強く限定されてきたという歴史的な背景があると。特に明治以降ですね。富国強兵の政策の中で、男は強くあるべき、女は家庭を守るという存在であるというのは徹底的に教育されてきた。それが今、社会の中で大きな男女差を生んできたというのは会ったと思うんですね。それをどう超えていくかっていうのは、Ｃさんのお話しにもありましたが、「教育」の問題なのかなっとも思います。ありがとうございました。

　では、Ｂさんのところは、男の子も女の子もいらっしゃると思いますが、いかがですか。

Ｂさん：私も、Ｃさんと同じで、子供の頃は男が青で、男女の差っていうのはあったんですけど。私自身も社会に出て、最初の会社で社長は女性でしたし、前の会社でも上司は女性で。あんまり、職場の環境で、男女差というのを感じたことはないですね。家庭でも、妻と上二人が女性で、家庭内では女性パワーのが強い（笑）っていう状態です。で、あの、ふと先程のアンケートを見て思ったのが、やはり、男の子は泣いたりしちゃいけない、けんかしたりする、お前、男だろうって言っちゃう。男は我慢しろ、とか言っているので。まあ、強くなくてはいけないとか。まあ、ちょっと言葉を気をつけた方がいいかなと感じました。以上です。

川中子：ありがとうございます。うちは、私以外女ばかりですので、男の子がいる家庭はどんな感じなのかなっていうのが想像つかないんですが。自分自身は男兄弟の中で育ったんですが。Ｄさんのところも両方いるかなと思うんですが、どうですか。

Ｄさん：小学校が、一番、男女の差がないんじゃないかなって思いますけど。子供の頃は、６年生の時に腕相撲大会やりましたけど、女子が優勝しました。（笑）小学校が一番、そういうのがないのかなって気がします。社会人になって、うちの会社は女性のが多いんですが。男女で言えば、女性のが強いんじゃないかなって気がしますけど。ほとんど男女の区別はなくて、ただ、この間会社のレイアウト変更があって、机を運ぶときに、そういうときだけ、男性中心にやりましたけど。その言い方は、気をつけないといけませんね。男がやれっていうとまずいので、名前を呼んだりして。昔よりは、どんどんそういうのなくなっているんじゃないかなって思います。それがさっきの世界の順位が落ちたって言うのと関係があるのかなって言う気がしますけど、今、どんどんどんどん変わっている時期だと思います。

川中子：そうですね。まさに今、どんどん変わっている時期で、ようやくそれが議論に上るようになってきたのかな。夫婦別姓の話しなんかも、今、政府でも取り上げて喧々諤々やってますけど、未だにどうしてもこうあるべきというのが抜けなくて、議論が平行線をたどっているところもあります。それでは、Ｅさんいかがですか。Ｅさんのところも男の子も女の子もいますね。

Ｅさん：はい。最近会社の研修なんかでも同じような話題があるんですけど。性差別とか、人権の話。子供のころというか、小学校４年生、５年生くらいって、実は子供たちも男も女もあまり自分たちでは意識していない部分も多くて。ただ、女子の方がだんだん頭が先に、精神的な成長が早いので、男の子に比べると、男女の差について考え始める時期ですが。一緒に遊んでいるのを見ると、そのへん全く気にしてないって感じですね。男だから女だから、というより好きだから、楽しいから一緒に遊ぶ。子供たちを見ていると、子供たちの方がジェンダー・ふりーだなって。大人たちは、それをあまりにも気にしすぎて。例えば、さっきの青は男、赤は女って。それは単純な、男の子と女の子を分けるための作業であって、差別する作業ではない気もしますし。ただ、場面のよって、さっきＢさんも言ってましたけど、「男だから泣くな」とか。「女だから…」っていう、男だから女だからっていう決めつけた形で言ったりしなければ、それぞれの体力の差であったり頭の良さの差であったり、祖言う言ったものを規準に考えていければと思っています。

川中子：どうもありがとうございました。大分、世の中変わってきているんだなって言うのは、皆さんのお話を聞いてもよく分かります。会社なんかの様子も、私たちにはよく分からないんですけど、今お話し伺ったところによると、ずいぶん男女の差というのがなくなってきているのかなっていう感じがします。もしかしたら、会社も、外資系の会社はそういう傾向が強くて。古くからある日本の会社は昔のを引きずったりしているかな。それから、皆さんがいるのは東京という大都会ですので、地方の小さな町とは状況が異なるかもしれませんね。

　私も今回いろんなところで調べているところなんですけど、例えば、この、上野千鶴子さんという東大の教授のかたが、東大の入学式で話したスピーチのことが話題になりました。これまで、女性が虐げられてきたことなど、入学式で学生に話したという…。ああ、Ｆさん、声聞こえるようになりましたね！途中、聞こえなかったかもしれませんが、男らしくとか女らしくとか、いかがですか。

Ｆさん：３年生の息子です。今、帰ってきたんですが。下着で、ピンク色が入っているボーダーのパンツをはいていったら、お友達に見られて、「お前、ピンクのパンツはいてんな！」って言われてから、学校にははいていかなくなってしまって。本人は全く気にしていないので、アウターの短パンとかはピンクのものをはいてたりするんですけど、本人としては気に入って使っているけど、インナーは指摘されてから恥ずかしくなってしまったというようなことがありました。

川中子：そうですか。本当にね、多分、さっきアンケートとったっていう話をしたんですが、ああやって改めて聞けばそれはおかしい、って子供たちも気がつくんだと思うんですけど、日常の生活の中では、今のお話しのようなことはけっこうあるんじゃないかなって思うんですよね。

　今、本校は三つの教育目標「自立」「共生」「健康」というのを子供たちに身に付けてほしい、と教育を進めているんですけど。「自ら学び、考え、行動」できるようになってほしい。「思いやりをもって、共に生きる人」になってほしい。このあたりって言うのは、これからみんなが大人になっていく上でとっても大事なことで、さらにダイバーシティーってことを考えますと、もう日本は、世界の中でかなり遅れた国になってしまっていますので、日本だけでどうこうするということができなくなっています。例えば、コロナの問題を解決するというのは、自分の国だけではできないんです。いろんな国の人と協力していかなければならないし、男と女が、お互いのいいところを出して社会で活躍できるようになっていかなければならないんじゃないかなということを、子供たちの教育に携わりながら感じているところです。

　それでは、そろそろ時間になります。今日は、このお忙しい時間帯にご参加いただきありがとうございました。これからも、こういう機会を設けて、一緒に考えていければなあと思っています。またぜひご参加ください。ありがとうございました。